

訪中私記

中日友好医院開院式に列席して

真柳 誠

昨年の十月二十三日、北京に中

日友好医院が開院、日本からも多くの関係者が訪中して盛大な式典とレセプションが催された。東洋医学関係者は、北里研・東洋医学総合研究所から矢数道明氏、東方医療振興財団から間中喜雄氏など、津村順天堂から津村会長などと、計十数名が中国衛生部の招聘を受けた。筆者は幸いにも矢数道明氏に随行し、その一部始終をつぶさに見聞する機会に恵まれた。そこで本紙面を借り、筆者の私見を交えこれを報告しておこうと思う。

友好医院の建設と現況

すでに新聞等で周知のことであるが、本医院は故大平総理の提唱により、日本政府・国際協力事業団の一六四億円にのぼる無償援助で建設されたものである。建設の決定後、中国内には建設地及び開院後の所轄等について様々な確執が生じ着工を遅らせたが、最終的には北京中医学院の隣接地に設置するが、管轄は衛生部が直接行うことに落ち着いた。日中両政府の本院を設立する趣旨の一つは、

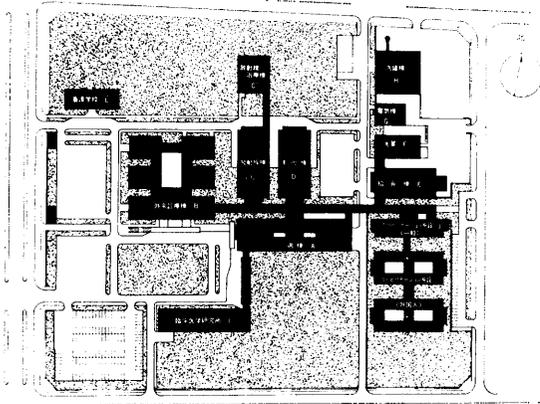
日本の現代医学と中国の伝統医学の結合にあるので、友好医院と中医学院双方の研修に都合の良いこの地が選ばれたのである。

医院は一九八二年一月十五日に着工、約二年半を費し昨年七月二日に完成した。設計の全部と建設指導は日本側が行ったが、用地の提供と建設は中国側が担当した。工事の最盛期は、一日延べ二千人の労働者に加え馬も動員されるなど、中国ならではの海戦術で敢行された。

ところでこの一帯は元々人民公

社の農地であった。また元朝の首都「大都」の旧城壁跡のすぐ内側で、墓地の多かった地域である。

機構は、(○)外来部門(一日二千人)、(□)病棟(二千床…その内、高級幹部と外国人用が二百床、



▲ 醫院平面圖

中日友好医院平面圖

(3)リハビリ部門(三百床)、(4)臨床医学研究所(研究人員二百名)、(5)中等衛生学校(在校生四百名、看護婦を主に、放射線技士・検査技士・調剤士を養成)の五部門となっている。将来はサービス部門も拡充して敷地内にホテルを附設し、外国からの長期療養者を受け入れる予定のことである。

医院内には約八百名の中医師と西医師、及び中西結合医師、また一千名の看護婦、三百名の医薬技士、これに一般職員と党政治職員を加え総計三千七百名ほどが従事している。また本敷地にあった人民公社の農民とその家族の多くが一般職員に採用されている。本医院は今後中国における最高の医療機関となるべき要請から、国外より最新の医療機器を導入しているばかりでなく、医療従事者にも高い質が求められているようだ。そして中医師の多くは北京中医学院と中医研究院から、西医師は北京医学院と医学科学院(首都医院)を中心に抜擢されているようである。ちなみに本医院には、設立の決定後に千葉大や阪大等の医学部や病院に派遣されて研修した西医師や医薬技士、また日系や旧満洲出身の医師等も多く、一つのカラーを作っているように見えた。又聞するところによると、かつて中国の西医師には、ソビエト派、ア

メリカ・フランス派、それにドイツ・日本派が、各々の留学先や列強の建設した出身校別にあり、ドイツ・日本派は少数で肩身が狭かったそうである。今後は本医院を核に、良い意味で新日本派が芽生えてくるのかもしれない。

さて本院の最大の特徴は、中西結合医学を中心に、現代医学と伝統医学の三者を併存させ、最新の設備を駆使してこれらを更に高い水準へと止揚させることを設立趣旨としていることであろう。したがって臨床部門は中西結合医学と現代医学で二十三科、伝統医学は内科、熱病科、骨傷科、肛腸科、婦人科、小児科、老人科など十四

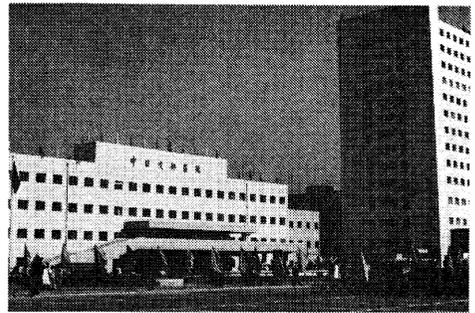
に分割されている。また院長は胸部外科が専門、針麻酔手術で著名な中西結合医・辛育齡氏、副院長の一人は元北京中医学院教授で温病が専門の老中医・印会河氏など、各々その役職も分割分担されている。この様な条件に恵まれた医院は日中共にかつてなかっただけに、そのゆくえは中国国内ばかりでなく、わが国でも刮目して見守る価値があらう。中国国内では、とりわけ中西結合医師と新中医師(中医学院卒の中医師)に比べて本医院の設立が、極めて大きな意義を持つことになると思われる。この二種の医師は、年数の相違はあるが現代医学と伝統医学の

正式な教育をほぼ同等に大学で受けている。つまり友好医院は彼らの臨床と研究の場として、最も理想的モデルとなるからである。同時に本医院の臨床と研究成果が、わが国における伝統医学の再評価と研究にも多くの客観的資料と示唆を提供することが期待されよう。そうあってこそ、本医院が単に両国友好の象徴としてばかりでなく、将来両国医学界の協力交流の橋頭堡となり得るものと言えよう。

### 開院式典と記念レセプション

開院式典と開院記念レセプションが挙行されたのは、十月二十三日の午後と晩である。筆者らは中国側の要望により前日の二十二日に北京入りしていたが、当日は前日に継ぎ雲一つない好天であった。東京より幾分寒いことを予想していたが、朝から軽く汗ばむほどで、屋外で開院式が行われる午後の陽気が少々気になるほどであった。

これに先立ち、東洋医学関係者は午前中に友好医院の参観に招かれた。医院の広い駐車場には式典用の会場が既に設営され、その周囲と全建物の屋上には赤、青、黄の原色の旗がはためき、すっかりとお祭り気分である。また敷地の

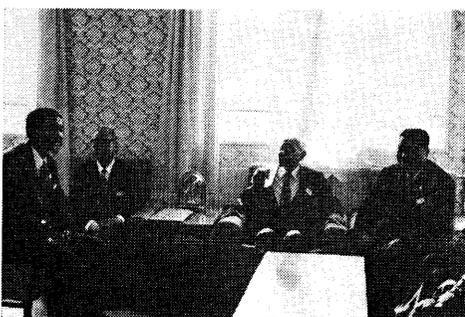


学関係機関の要望に応じ、多くの漢方医学書籍を寄贈されている。そして今回の中日友好医院開院を記念し、当初開院が予定されていた十月一日の国慶節(中国建国記念日)に合わせ、『漢方の臨床』誌全巻他を既に友好医院宛に郵送されていた。我々はまず院長室に案内され、矢数氏はそこでこの贈呈書目録を辛育齡院長に手渡し、開院と今後の発展を祝した。その後、西医の強副院長と中医の印刷局長を囲む座談会が持たれ、両氏から友好医院の抱負などが述べられた。

ほぼ中央には巨大な蓮の花を象った噴水があり、その花弁に塗られた鮮やかな色彩が雰囲気を一層華やかに盛り上げている。医院の正門には副院長の印会河教授が我々を出迎えておられた。印教授は、以前は北京中医学院附属東直門医院教授の老中医で、そのいかにも中国の「大人」らしい風貌と人なつこい笑顔で、学生達から「八戒老師」と愛称されて人気があった。また筆者には北京中医学院に留学中、同行していた妻のこじらせた病を治療していただいたこと

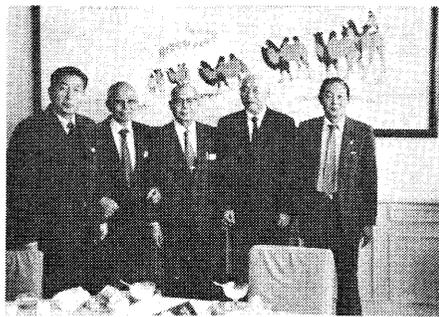
もある恩師である。と

ところの今回招聘された東洋医学関係者の代表格である矢数道明氏は、これまで中国各地の伝統医



左より強副院長、矢数氏、間中氏、印刷局長

による昼の招宴に出席した。主催者側の代表である銭信忠前衛生部長、崔月掣現衛生部長の御二人とも、矢数・間中両氏とは旧知の間柄である。旧友を厚くもてなす中国のことゆえ、親交を暖められたようである。また筆者ら残りの関係者は、引き続き院内の外国人・



二十三日昼、衛生部の招宴  
左より崔現衛生部長、間中氏、矢数氏、  
銭前部長、平井氏

高級幹部用病室、リハビリ施設、中医の内科外来等を参観した。院内は日本の設計によるものだけに、案内の標識に至るまで現代的なものとなっている。だが筆者にとって、特に印象深かったのは制服の変化である。中国では従来、医師、看護婦、調剤士などの白衣に厳密な区別はなく、一般に外見



外国人用リハビリ部門

からの判断は困難であった。ところが友好医院では中国風に幾分アレンジされてはいるが、各々に日本など同様の区別があり、筆者の目には奇妙なほど新鮮に映った。将来は外国からの患者も多数受け入れる予定、とのことである。恐らくはその理由もあり、従事者の服装や容姿まで配慮しているのではあるまいか、と勝手な憶測をめぐらしたりした。

さて今回の中心である開院式典は、夏を想わせる好天下、午後二時半より友好医院の屋外に臨設された会場で挙行された。会場では両国旗を背に、両国政府要人が一段高い演台にずらりと並んでいる。日本からは鈴木本総理夫妻、

故大平総理夫人、橋本前厚生大臣夫妻、渡部現厚生大臣、有田国際協力事業団総裁、中江駐中国大使など。中国側は、趙紫陽総理、王震中日友好協会名誉会長、陳慕華對外經濟貿易部長、谷牧國務委員、万里中央政治局委員、辛醫院長、崔現衛生部長、辛醫院長などである。ちなみに、中国政府では高級幹部の世代交代を進めて



開院式典

いるとはいえ、このクラスになると高齢者が多く、顔を見せるのは国慶節時の天安門広場などに限られている。また一つの政府が十億人の政治から経済に至る全てを管理する体制のためか、政府中枢の要人は雲上の人という意識がわが国以上に強いように思われる。したがって壇上の両国政府要人の名

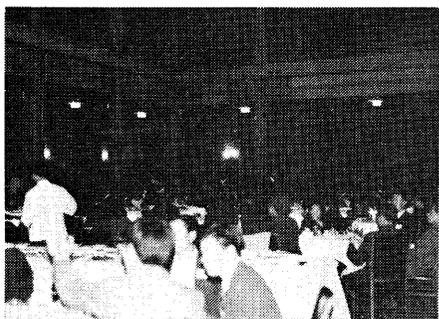
が読み上げられる毎に、会場の中国側参列者より大きなどよめきが起こっていた。居合わせた筆者の中国人友人は自国政府の最高級クラスがかくも列席したのを見て、本医院に与えられた政治的意味あいの大きさを再認識したと語っていた。式典は崔部長、渡部大臣、中江大使、辛院長の順に祝辞と挨拶が述べられ、三時半にテープカットと賑やかな爆竹でしめくくられた。

開院記念のレセプションは、これに続き会場を人民大会堂に移し開かれた。人民大会堂は日本の国会議事堂にほぼ相当するもので、天安門広場の西側に面する壮大な建物である。当日も入口の警戒は厳重を極め、招待状を忘れた日本の報道関係者が入場を制止されてもめる一幕もあったほどである。

レセプションに先立ち、四時半から記念写真の撮影が行われた。撮影はまず約千二百人の参加者を一段二百人づつ上下六段に分けて半円状に立たせ、これを数人の担当者や千二百人の顔が互いに重ならないように調整することから始まった。これに約十五分は要したであろうか。そして半円周の中心に据えた独特のカメラを、左から右へゆっくり回転させながら撮るのである。中国では大人数の記念撮影には必ずといってよいほどこ

のカメラが使用される。まるで映画のカメラの如くに撮るのだが、出来上った写真は一枚の連続した横長のものとなり、魚眼や広角レンズで撮ったゆがんだ写真よりはずっとまともである。矢数氏の話では台湾でもこのカメラがあるそうだが、日本では見たことがない。ともかく何時見ても不思議なカメラではある。

さてレセプションは午後六時より始められた。会場は三階の中ホ



開院レセプション於人民大会堂

ールであったが、それでも普通の体育館などよりはずっと広い。数えてみると、テーブルは全部で二百であった。各人の座席は正面中央に両国首脳の大円卓、その周囲が日本政府関係者と参加者の地位順に定められている。開院式典時

の座席、写真撮影で立つ位置、そしてこのテーブル、と千数百人及び両国参加者の地位を判断し、相互に組み合わせた順を一々作成するのであるから、裏方はさぞ大変であったろう。料理はバイキング形式で、期待したほどではなかった。たとえ人民大会堂とはいえ、これだけの人数分を一度に作るのだから無理からぬことである。両国代表者の挨拶が済むと、鉄腕アトムの主題歌も交えた両国の歌やピアノ演奏等の出しものがあり、宴はにぎにぎしく七時半まで続いた。そしてこれをもって今回の公的行事は全て完了した。

### 中医界の歓待と任応秋教授の告別式

筆者らは翌二十四日、翌々日の二十五日午前まで北京に滞在し、午後の飛行機で帰国した。この一日半には四回もの招宴が続ぎ、まさに飽食三昧である。革命後の中国で著書が翻訳出版され、中医界では最も著名な矢数氏、そして間中氏の日本湯液界・針灸界の両長老がそろって訪中されたのであるから、中国側の歓迎もひとしおであった。

二十四日は北京中医学院と中医研究院に、各々昼食会と夕食会に招待された。場所は偶然にも「知味観」という杭州料理のレストラン

ンで、同一であった。ここは近年の自由化政策で杭州から調理士を招き、屋号を改め新規開業したところである。賓客用の室内は、筆軸などでも有名な杭州特産の竹でついでから椅子、テーブルに至るまで装飾され、実に凝ったつくりであった。昼食会は東洋医学関係者全員が招待され、北京中医学院



二十四日昼、北京中医学院の招宴にて  
左より王綿之教授、矢数氏、間中氏、  
王永炎院長

からは王永炎院長、高奎乃副院長、王綿之教授、何素清外事処長らが来ておられた。王院長、高副院長、王教授らはいずれも来日講演されたことがあり、互いに面識のある方ばかりなので、うちとけた和やかな宴となった。昨晚の人民大会堂よりは数段美味な杭州料理に舌

づつみを打ちながら、皆久し振りの再会に歓談は尽きなかった。ところでその午後は本来、臥床中の任応秋北京中医学院教授のお見舞いを矢数・間中氏は予定していた。任教授は現代の孫思邈とも称すべき近代最大の大碩学であり、その大著『中医各家学説』でわが国斯界でも令名高い。昭和五

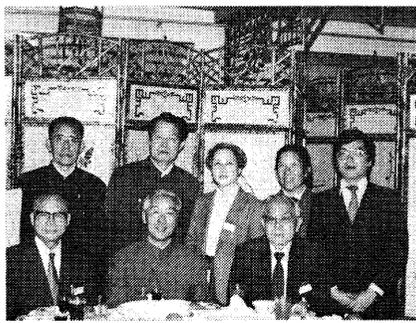


一九八二年一月二〇日、各家学説研究室にて  
中央が任教授、その後方は小曾戸洋氏、  
左より二人目は筆者

十八年の第三十四回日本東洋医学学会術総会には、中華全国中医学会を代表して来日講演を予定されていたが、その直前に至って肺腫瘍にて入院加療中であった。そして矢数氏らは今回の訪中を機会に見舞いに伺うつもりで、その旨は招聘を受けてすぐに連絡してあつ

た。ところが訪中も間近の十月十七日午前、任教授御逝去の思いもよらぬ訃報が中医学院留学中の植地氏より筆者の許に連絡されたのである。任教授は病床で矢数・間中両氏との再会を待ち詫びているとの連絡を受けていただけに、この悲報には愕然とした。そして任教授の御遺族と中医学院の配慮により、十月三十一日の本葬に先立ち、我々一行だけのための告別式がこの午後に設けられたのである。任教授が入院されていた東直門医院の接待所で御遺族、高鶴亭中医学院党書記らに面会し、矢数・間中氏より懇ろに追悼の言葉が述べられた後、医院内の靈安所で御遺体と対面した。中国式に一人一人が献花し、しめやかな告別式がとり行われた。矢数・間中両氏と海を越えた友情で結ばれた任教授との最期の別れである。両氏の哀惜の御気持ちは察するに余りあるものであった。

さて北里東医研に所属する矢数道明、間中喜雄、板谷和子の各氏と筆者ら四人は、その晩六時より再び「知味観」にて中医研究院の宴に招かれた。中医研究院からは施奠邦院長、李経緯医史文献研究所長及び馬継興同副所長、薛清禄図書館長、朱冬生外事処長らが出席された。現在北里東医研と中医研究院とは姉妹提携の予備交渉



二十四日夜、中医研究院の招宴にて  
前列左より矢数氏、施院長、間中氏、  
後列左より馬医史文献研副所長、李所長、  
板谷氏、薛図書館長、筆者

中であり、一昨年より東医研の医史学研究室と中医研の医史文献研究所・図書館とは古医籍文献等の交換協力が行われている。今回の訪中に当っては、東医研からの贈呈書籍四十数冊が滞行されていた。矢数道明氏や大塚敬節氏らが、戦前の困難な時代から今に至るまで中国の漢方各家と交流を続けられていたことはわが国では良く知られている。そして今回の贈呈書目録が披露され、矢数氏らの熱意が伝わると雰囲気は一段と盛り上った。また間中氏の中国語も交えた軽妙洒落なユーモアは緊張をはぐし、一同は旧知の如き自由さで語り合った。今回の訪中で最も楽

# 去年今年

玉置 石松子

べつたら市むかしは旦那いま社長

茅苻の猫脊となりて枯れわたる

廂間や仙の箱庭末枯れて

軽子とは河岸の賤業一葉息

冬至風呂不随の妻を揉みほぐし

冬うらら飛行船浮き退院す

去年今年自嘲に揺るる弥次郎兵衛

女正月秘密覗きに鶴来て

べえ独楽や仲間はずれの着ぶくれし

昭和二十六年十月二十四日 第三種郵便物認可  
和漢薬二月号第三十五卷第二号 昭和六十年二月一日発行(毎月一回)

しくうちとけた一時であった。

そして翌二十五日の昼にも二つの招宴が開かれた。一つは崔衛生部長個人の宴で、矢数・間中両氏と津村重舎氏などを招き、北京飯店で開かれた。中国側を含め十名に満たぬ極く内輪の会である。崔部長は周知のことと思うが、中華全国中医学会の会長も兼ねる中医の出身で、昭和五十五年に金沢で開催された東洋医学会総会に中医学会代表団長として来日されている。また同席した銭前衛生部長は西医出身であるが、革命前の一四六六年に宮前武雄著『和漢薬応用の実際』を翻訳し、『実用中薬大綱』として出版されるなど東洋医学の造詣も深い。今回中国に招聘された医学関係者は、前述した友好医院の設立趣旨上、多くは現代医学関係者であった。だが現衛生部長と前部長の最も親しい友人として、矢数・間中両氏と津村重舎氏という東洋医学関係の代表者格のみを招いた会が持たれたことには、中国側の深い配慮が窺われた。

さていま一つは、友好医院の印会河副院長による招宴である。これには矢数・間中両氏を除く東洋医学関係参加者が招かれた。場所東直門付近の山東料理専門店、友好医院からは印刷院長と焦樹徳中医内科副主任らが出席された。

当日は印刷院長の胆入りで引退していた老調理士を特に招いたというだけに、材料の吟味から盛り方まで筆者が今まで食した山東料理中で最高のものであった。だが印刷院長は我々と杯を重ねるにつれ、崔部長に矢数・間中両氏をとられたとぼやくことしきりである。今回の開院式参加者中の少数派であった東洋医学関係者を、友好医院中医部門の面子をかけてもなしているのに、その主体である両氏が昨晩急遽決定した崔部長の招宴で欠けてしまったのであるから、印刷院長が残念がるのもっともである。しかし一同は印氏のすすめ上手と、これで今回の日程は全て終りという気分も手伝い、飛行機の時間が迫る寸前まで杯を重ね談話が続いた。

その後飛行場で矢数・間中両氏と落ち合い、夕方には成田に到着、今回の訪中は無事終了した。想い起せばわずかに三泊四日の日程であり、連日の行事のため中国の友人とゆっくりと語り合う機会どころか、土産を買いに出る時間もなかった。街に出たのは唯一到着した夜、昨夏から認可された夜店の見物に一人で出た時だけである。だがそれでも宴会時の雰囲気や何げない会話の端々から、ここ一、二年における中国の大きな転回が窺われた。近視眼的に中国全体を語

ることが無意味であることを承知しているつもりであるが、筆者がかつて中国に対して抱いた一種の諦念が幾分薄らいだような気がする。そしてこれにも増して痛感されたことは、現在の中国にとって伝統医学を真に共有し、理解しあえる外国は日本しかない、という日本の東洋医学界に対する中医界の熱い期待と友情であった。ともあれ今回の訪中は、筆者にとって様々な点で感慨深いものであった。

本拙報は筆者の記憶とメモ等を資料とし、兼ねて私見を加えたもので、正確を欠く点があるやもしれない。すべて筆者の責に帰すところである。この点を了とされれば幸いである。

(筆者所属・北里研究所附属東洋医学総合研究所・医史学研  
究室)

和漢薬 第三十五卷 第二号  
二月号(通巻三百八十一号)

昭和六十年一月二十五日 印刷  
昭和六十年二月一日 発行

定価 百五十円(送料共)

編集者 伊 藤 敏 雄

印刷所 神田印刷株式会社

新宿区市谷谷船河原四

東京都中央区日本橋本町四ノ一三

株式会社 ウチダ和漢薬

振替東京二七四〇番  
電話東京四二四四番